

2026年度 早稲田大学 文学研究科
修士課程一般入学試験 入試問題の訂正内容

〈修士課程一般入試〉

【専門科目 東洋哲学コース】

問題冊子：1 ページ 17行目

設問番号：二

選択肢チ

(誤) 范曄

(正) 范曄

以上

2026年度 早稲田大学 文学研究科
修士課程一般入学試験 入試問題の訂正内容

〈修士課程一般入試〉

【専門科目 東洋哲学コース】

問題冊子：1 ページ 19行目

設問番号：二

選択肢二

(誤) 修己治他

(正) 修己治人

以上

一、次のアからカの中から、一つを選び、知るところを述べよ。(解答用紙に題名を明記せよ。)

- ア、インド佛教における唯識説
 イ、中國における儒教の國教化
 ウ、朱子學の工夫論
 エ、道教における道士の位階制度について
 オ、日本における戒律の受容と展開
 カ、日本古代佛教と末法思想

二、次の諸問中から、六問を選んで説明せよ。(解答用紙に題名を明記せよ。) ※解答用紙三行程度を、解答の目安とせよ。

- | | | |
|--------------|--------|----------------|
| ア、屍解 | イ、龍樹 | ウ、元曉 |
| エ、墨子 | オ、心外無理 | カ、醮齋 |
| キ、安樂集 | ク、日蓮 | ケ、中世神話 |
| コ、會讀 | サ、八幡信仰 | シ、成實論 |
| ス、承負 | セ、荻生徂徠 | ソ、吉田兼俱 |
| タ、三寶繪 | チ、範曄 | ツ、秘密曼荼羅十住心論 |
| テ、四句分別 | ト、湖南學 | ナ、止觀 |
| ニ、修己治他 | ヌ、玄學 | ネ、唱導 |
| ノ、大乘非佛説 | ハ、懷德堂 | ヒ、白虎通 |
| フ、praśrabdhi | ク、dāna | ホ、darśanamārga |

三、次の六問中から、二問を選んで記せ。(問題記号を明記せよ。)

ア、次の文章を書き下し文にせよ。

河間獻王曰、堯存心於天下、加志於窮民、痛萬姓之罹罪、憂衆生之不遂也。有一民饑、則曰此我饑之也。有一人寒、則曰此我寒之也。一民有罪、則曰此我陷之也。仁昭而義立、德博而化廣。故不賞而民勸、不罰而民治。先恕而後教、是堯道也。當舜之時、有苗氏不服。其所以不服者、大山在其南、殿山在其北、左洞庭之波、右彭蠡之川。因此險也、所以不服、禹欲伐之。舜不許曰、諭教猶未竭也、究諭教焉。而有苗氏請服、天下聞之、皆非禹之義、而歸舜之德。

『說苑』

イ、 次の文章を書き下し文にせよ。

盡其心者、知其性也。知其性、則知天矣。言人能盡其心、則是知其性、能知其性、則知天也。蓋天者、理之自然、而人之所由以生者也。性者、理之全體、而人之所得以生者也。心則人之所以主於身而具是理者也。天大無外、而性稟其全、故人之本心、其體廓然、亦無限量。惟其枯於形器之私、滯於聞見之小、是以有所蔽而不盡。人能即事即物窮究其理、至於一日會貫通徹而無所遺焉、則有以全其本心廓然之體。而吾之所以爲性與天之所以爲天者、皆不外乎此而一以貫之矣。

『朱文公文集』

ウ、 次の文章を書き下し文にせよ。

先生姓孫、名遊嶽、字穎達、東陽人、吳之裔也。幼而恭、長而和、其靜如淵、其氣如春、甄汰凡流、潛神希微。嘗步赤松澗縉雲堂、卜終焉之地。宋文帝太初中、簡寂先生至廬、嶽乃執籍事之、遂授三洞經法及楊・許二真人墨迹。其後茹芝却粒、又專服穀仙丸、六十七年顏色精爽、久而愈少。暨簡寂羽化、還舊隱、研味真趣。至齊武帝永明二年、詔主興世館。由是奇逸之士、爭相趨赴、若孔德璋・劉孝標輩、皆結方外之好。雖常以病求歸、詔命未允。以七年五月中、忽沐浴安坐而終。門弟子數百人、惟陶弘景爲入室、以三洞經及楊・許墨迹竭篋相付。後弘景因撰真誥行於世。

『歷世眞仙體道通鑑』

エ、 次の文章を書き下し文にせよ。

又舍利子。極樂世界淨佛土中、常有種種奇妙可愛雜色衆鳥。……如是衆鳥、晝夜六時恒共集會、出和雅聲、隨其類音宣揚妙法。所謂甚深念住正斷、神足根力、覺道支等、無量妙法。彼土衆生聞是聲已、各得念佛念法念僧、無量功德熏修其身。汝舍利子、於意云何。彼土衆鳥、豈是傍生惡趣攝耶。勿作是見。所以者何。彼佛淨土無三惡道、尚不聞有三惡趣名。何況有實罪業所招傍生衆鳥。當知皆是無量壽佛變化所作。令其宣暢無量法音、作諸有情利益安樂。

『稱讚淨土佛攝受經』

※WEB掲載に際し、左記のとおり出典を追記しております。

『大正新脩大藏經』第12卷 稱讚淨土佛攝受經（大藏出版1988年出版）

オ、 次の文章を書き下し文にせよ。

弟子南瞻部州大日本國關白左大臣從一位藤原朝臣某稽首和南三世諸佛。側聞、造寺起塔者、以大慈觀爲先導、以菩提心爲本根。尋勝概於異代、則栖巖之基無朽、憶微功於往劫、亦聚沙之戲不空。諸善之中、莫先於斯矣。

夫法成寺者、祖父入道太相國、爲志求佛道、鎮護國家、所草創也。誠是佛法中興、香花不退之道場也。而去康平年中、忽有火孽、悉爲煨燼。

『法成寺塔供養願文』

※WEB掲載に際し、左記のとおり出典を追記しております。

『新訂増補国史大系』、214頁、吉川弘文館

カ、以下の文章を和訳せよ。

A scholar of late antiquity might now find it reasonable to ask whether forth-century Egyptian or Byzantine monks continued to interact with their families. For many scholars of Buddhist studies, however, such questions may seem misplaced. Indeed, Buddhism is about renunciation of one's family – or so runs the received wisdom. Why would a nun or monk continue to associate with a family member whom s/he had just renounced or abandoned? It is precisely assumptions such as this that have guided the questions scholars of Buddhist history have asked and, more important, not asked. I contend that the assumption of a complete lack of contact between monastics and their family members has contributed to the construction of a scholarly and popular vision of Indian Buddhist monasticisms that is not supported by the preponderance of our premodern evidence.

Shayne Clarke, *Family Matters in Indian Buddhist Monasticisms*

※WEB 掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

Clarke, Shayne. *Family Matters in Indian Buddhist Monasticisms*. pp.3 University of Hawai'i Press, 2014.

受験番号	
氏名	カナ
	漢字

この欄以外に受験番号、氏名を記入しないこと。
漢字氏名がない場合は、ひらがなで記入すること。

———ここから記入すること———

東洋哲学

総 点

(裏へ続く)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(次頁へ続く)

———
ここから記入すること
———

(裏へ続く)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

東洋哲学

——ここから記入すること——

(裏へ続く)

Lined area for writing.

———これより先の余白には絶対に記入しないこと———